

旧石器時代

奄美市笠利町の土浜遺跡、喜子川遺跡では、約2万6千～2万9千年前に始良カルデラの巨大噴火で噴出した火山灰層が確認され、その下層から人工的に割りとられたと考えられるチャート製剥片が出土しました。

これらの発掘調査結果から、旧石器時代に奄美大島でも人々が暮らしていたことが明らかになりました。



喜子川遺跡(奄美市笠利町)

縄文時代



宇宿貝塚(国指定史跡)

縄文時代には、約7千年前から竪穴住居の集落が営まれるようになり、個性的な土器文化が開花しました。

奄美群島の日本復帰直後に行われた宇宿貝塚の発掘調査では、立派な石組の竪穴住居の集落が発見され、上層から文様がないう器(宇宿上層式)、下層から文様がある土器(宇宿下層式)が出土しました。



宇宿下層式土器
(宇宿小学校構内遺跡出土)

貝類を求めて遠隔地交易を行い、腕輪などの装身具を作り「威信財」にしていました。

奄美群島以南には、弥生文化・古墳文化は波及しませんでした。こうした貝交易により九州と強いつながりを維持していました。

律令国家が誕生した古代には、奄美群島からも中央政府へ朝貢が行われるようになります。

サンゴ礁が発達した奄美市笠利町の東海岸には、弥生時代以降、現在の集落が営まれている大形砂丘が形成されるようになり、土盛マツノト遺跡・用見崎遺跡・長浜金久遺跡などで、ヤコウガイの大量捕獲・集中加工が行われるようになります。

奄美市名瀬の小湊フワガネク遺跡は、そうしたヤコウガイ製貝匙などの生産拠点である様子が明らかにされています。

また、平安貴族がヤコウガイを用いたことが文献に記されていますが、奄美がヤコウガイの採取の一大拠点であったのではないかと考えられています。日宋貿易に従事していたと考えられる商人の様子が『新猿楽記』に描かれていて、北はソトガハマ(青森)から南はキカイガシマ(鹿児島南方海域)までヤコウガイや硫黄、舶来の唐物などを取り扱い、列島規模で移動していたようです。



オオツノハ貝輪(宇宿小学校構内遺跡出土)

イモガイ製貝札
(サウチ遺跡出土)



小湊フワガネク遺跡(国指定史跡)

ヤコウガイ製貝匙



中世

奄美群島では、中世の拠点的遺跡の発見が相次ぎ、九州・朝鮮半島・大陸との交易の中継点として、奄美群島が重要な地域

弥生・古墳・古代並行期

弥生時代には九州の首長たちが、その力を誇示するため、南西諸島に生息するゴホウラ・イモガイ・オオツノハ等の大形

であったことが明らかになりました。

11世紀には、漁労採集社会から農耕社会へ変化して、奄美群島でも政治的社會が急速に形成されました。

奄美大島では、14世紀ごろから沖縄のグスクとは異なる、石垣を持たない中世山城に類似した城郭遺跡が多数構築されています。その中で最大規模を持つのが赤木名城跡です。

琉球王国統治時代



ノロの祭事

1429年に琉球王国が成立すると、15世紀中頃には奄美群島はその支配下に入り、琉球王から任命された女性祭祀者(ノロ)による地域統治が行われました。奄美市名瀬の大熊・浦上・有屋・仲

勝の輪内地区は、かつてノロ祭祀が盛んに行われていた所で、今でもトネヤ跡が残されています。



赤木名城跡・堀切(国指定史跡)

薩摩藩統治時代

1609年、薩摩藩が琉球王国に軍事侵攻し、その結果、奄美群島は琉球王国から分割され、薩摩藩の統治下に入ります。薩摩藩の行政施設である仮屋(代官所)は、赤木名を中心として、名瀬大熊にも置かれました。

1690年にサトウキビの技術が導入されると、キビ作が特産品として奨励されるようになりました。その後、「換糖上納令」により、サトウキビ生産に重点が置かれるようになると、食糧生産が乏しくなり、飢饉時には一家離散や廃村なども生み出すことになりました。また、税が納められなくなると、ヤンチュ(家人)と呼ばれる下人や下女なども生み出すこととなり、士族身分の郷土格や島役人と百姓などとの階層分化や、農民一揆が起こるようになりました。

近代

1868年に明治維新となり、薩摩藩による支配は終わりとなりましたが、鹿児島県による黒糖専売は続き、1874年(明治7年)には、鹿児島県の大島商社による専売制が結ばれています。その後、丸田南里らが黒糖の自由売買運動を展開し、1878年(明治11年)に大島商社は解体し、ようやく黒糖が自由売買となりました。



樽詰めされた黒糖。



代官所跡(奄美市笠利町)

米軍占領統治時代

第二次世界大戦で日本が敗戦を迎えると、翌年には、「2・2宣言」により、北緯30度以南の南西諸島は日本から行政分離され、奄美群島は米軍の統治下におかれることになりました。

引揚者も多く人口が増えたにもかかわらず、本土との航海が規制されたため、食料や日用品など物資は常に不足していました。島民は、ソテツなどで飢えをしのいでいました。

逼迫した生活のなかで、1951年から日本復帰運動が全国的に広がりを見せ、奄美大島復帰協議会の泉芳朗議長らによる復帰への署名運動や断食による抵抗運動、さらには、本土在住の奄美出身者たちによる国への陳情活動などにより、1953年12月25日、奄美群島は日本へ復帰することができました。

断食で日本復帰運動をする人々



日本復帰を喜ぶ人々(鹿児島県)

日本復帰の調印式(鹿児島県)

南海に浮かぶ奄美大島は、世界的にも特異な歴史をもつことで知られています。長く続いた狩猟採集生活、そして平安貴族や世界遺産・平泉の中尊寺とも関わるヤコウガイ産地としての魅力的な時代のほか、琉球王国や薩摩藩、アメリカ軍と様々な支配下におかれた苦難の時代もありました。

contact with the Taira clan and the World Heritage Chuson-ji Temple in Hirai-zumi, Iwate Prefecture. Tumultuous periods of rule by the Ryukyu Kingdom and Satsuma Clan and occupational rule by the American military followed.



奄美群島が日本に復帰することができた12月25日に、毎年「日本復帰記念の日(集い)」が開催されている。

奄美の歴史

Amami Oshima, located in the South Seas, is renowned worldwide for its singular history. During a long, fascinating period of hunting and gathering, the area's status as a source of Great Green Turbo shellfish brought it into

琉球王国支配下に、祭政一致の権力者だった祝女(ノロ)の扇